

# 指示語

今回の学習のポイント

- ① 「指示語」のはたらき
- ② 「指示語」が示す内容を理解す

## 「指示語」のはたらき

指示語とは、「これ」「その」「あちら」のように、物や場所など具体的な内容を指し示したり、尋ねたりするとき用いる言葉です。また、同じ言葉の繰り返しを避けるときにも用いられます。

例えば、とある場所で、誰かが「あれ、取って。」とお願いします。聞き手は、あれと示されたものを取ってやりました。さて、この会話で「あれ」が示すものは、話し手も聞き手も直接見ることが出来るものです。(現場指示) この場合、指示語は話し手と聞き手の位置関係(距離)や「話し手(私)」と周りの人(相手)の領域によって使い分けられます。また、その具体的なものを確認し合うことができます。一方で、指示語には示された内容をその場で直接見ることができないものもあります。主に文章中に出てくる指示語です。(文脈指示) 例えば、手紙に「山頂まで登り、そこで見た絶景に感動しました。」と書かれていたとします。この場合、「そこ」が指し示す内容は、直前の「山頂」です。文脈で判断します。左表は、指示語を体系的にまとめたものです。「こそあど言葉」とも言います。

様子	方向(人)	場所	物事	領域		不定
				話し手(私)	周りの人(相手)	
こんな(+名詞)	こう(+動詞)	こちら(こっち)	この(+名詞)	これ	あれ	どれ
そんな(+名詞)	そう(+動詞)	そちら(そっち)	その(+名詞)	そこ	あそこ	どこの(+名詞)
あんな(+名詞)	あんな(+動詞)	あちら(あっち)	あんな(+名詞)	あれ	あそこ	どこの(+名詞)
どんな(+名詞)	どう(+動詞)	どちら(どっち)	どこの(+名詞)	どこ	どこ	どこの(+名詞)

## 「指示語」が示す内容を理解する

「会話の指示語はわかるけれど、文中の指示語になるとよくわからなくなる。」という声をよく聞きます。しかし、文中に出てくる指示語は、繰り返しを避けるものが多く、指示語の内容はおおむね指示語の直前に述べられます。まれに、指示語の直後に述べられるものもありますので、注意しましょう。

国語監修・執筆

古宮才由里

さて、次の【例題】で、後に示した「指示語」の内容の読み取り方をヒントにしながらか一緒に考えてみましょう。

【例題】

次の文中の傍線部①、②の指示語が示す内容を答えましょう。

吾輩<sup>わがはい</sup>は猫である。名前はまだ無い。  
 どこで生れたかとうと見当<sup>けんとう</sup>がつかぬ。何でも薄暗いじめじめした所でニャーニャー泣いていた事だけは記憶している。  
 吾輩はここ<sup>①</sup>で始めて人間というものを見た。しかもあとで聞くとそれ<sup>②</sup>は書生という人間中で一番<sup>いちばん</sup>癡悪な種族であったそうだ。

(夏目漱石『吾輩は猫である』)

「指示語」の内容の読み取り方

手順1 「指示語」の直前(直後)を読む。

↓ ここで答え(指示語の内容としてふさわしい語句)がわかる。  
 (わかったら手順4へ。迷ったら、手順2、手順3の順に。)

手順2 「指示語」の性質(物事・場所・方向(人)・様子)を見る。

↓ 傍線部①「ここ」は、「場所」 ↓ 傍線部②「それ」は「物事」

手順3 手順2を踏まえ「指示語」とその後に続く文を入れ替えて、「疑問形」に直す。そうすると、答えがわかりやすい。

↓ 傍線部①「ここで始めて人間というものを見た」 ↓ 「始めて人間というものを見た」<sup>場所</sup>は? || 答え①

↓ 傍線部②「それは書生という人間中で一番癡悪な種族であったそうだ」 ↓ 「書生という人間中で一番癡悪な種族であったそう<sup>物事</sup>な」<sup>物事</sup>は? || 答え②

手順4 「指示語」の内容としてふさわしい語句(答え)を本文に当てはめて、文意が通るかどうかを判断する。

↓ 傍線部① || 答え①  
 (本文) 吾輩は薄暗いじめじめした所で始めて人間というものを見た。  
 文意 ○

↓ 傍線部② || 答え②  
 (本文) しかもあとで聞くと始めて見た人間は書生という人間中で一番癡悪な種族であったそうだ。  
 文意 ○ (点線部をつなげて読むと、正しいのがわかる。)

【答②】を「人間」にした場合

〔本文〕 しかもあとで聞くと人間は書生という人間中で一番癡悪な種族であったそうだ。

文意×（点線部をつなげて読むと、間違っているのがわかる。）

【補足】

長文の場合は、「指示語」が形式段落の「冒頭」に書かれているかどうかを確認しましょう。冒頭にある場合は、おおむね前の形式段落の要約が答えになります。また、指示語が形式段落の「途中」にある場合は、おおむね同じ形式段落の「指示語」より前の部分に答えを見つけることができます。ただし、文脈によっては、指示語より後に書かれていることもあります。文章を丁寧に読み、的確に判断するようにしましょう。

さて、「指示語」の読み取り方は、わかりましたか。次の【発展】にも挑戦してみましょう。

【発展】

傍線部の指示語が示す内容を読み取り、答えをまとめましょう。3については、答えとなる部分の最初と最後の五字（句読点不要）を抜き出しましょう。

1 映画はその制作使用の目的によっていろいろに分類される。教育映画、宣伝映画、ニュース映画などの名称があり、またこれらのおのおのの中でもいろいろ細かな分類ができる。  
（寺田寅彦『映画芸術』）

2 あの睡蓮は近ごろのものである。もとは河骨のようなものと、もう一種の浮き草のようなものがあったのだと記憶している。ことは睡蓮が著しく繁殖して来た。紅白二種のうちで、白いほうが繁殖力が大きいように思われる。実際そうであるか、どうか、専門家に聞いてみなければわからない。事実はどうだか知らないが、もしそうだとすると、これは一つのおもしろい問題になりそうである。  
（寺田寅彦『池』）

3 山路を登りながら、こう考えた。  
智に働けば角が立つ。情に棹させば流される。意地を通せば窮屈だ。とかくに人の世は住みにくい。  
（夏目漱石『草枕』）

